



# YES 通信



〒819-1116 糸島市前原中央2-2-22波多江ビル2F 電話 321-4119 2018年11月号

## 読解力を身につけるには「読む」が鍵

「国語ができない、読解力がない、本を読まない、どうしたらいいでしょうか?」こんな質問を良く受けます。しかし、私をはじめほとんどのみなさんは国語の勉強の仕方なんて教わったことがないのではないかと思えます。

塾業界でも国語力を伸ばすのは「国語力自体が今まで生きてきた中での蓄積だ」と諦めているところも多いのが現状です。つい先日もある塾長さんから「どうしたら国語力が付くのでしょうか?」という質問を受けたばかりです。

私もこの業界で仕事を始めて14年目に入りますが、今まで国語力の低い生徒さんを受け持つにつけ、そこが一番の課題だと感じていました。そもそも国語力を短期間で養成することは非常に難しい。受験前の短期間で国語力をつけるために時間を割くことは簡単なことではありません。しかし、受験前になって学習量が増えてくると国語の点数は不思議と上がってきます。それは、多くの勉強をする中で語彙力が増えたり古文漢文の知識が増えたりすることによって得点がアップするのかなのです。

しかし、一番本質的な読解力については短期的に成果を上げることが本当に難しいです。そこで、糸島学習塾YESでも早い時期から速聴読を学んでいただくことで地力をつけるような試みをしているの

です。

また、読解力のない生徒は文章を読んでもその内容を自分事としてとらえられないのも特徴です。だから、速聴読では感想文を書かせることで、自分事としてとらえる訓練をしているのです。

先日、石田先生という塾長さんで沢山の本を出版なさっている方の記事を見ました。その中にはこんなことが書いてありました。以下引用開始

文章を読むときは2種類の読み方がある1つは、意味を理解しながら読んでいく読み方です。この場合、書いてあることがひとつひとつ頭と心に入ってきていて、うまくいくと、文章と自分が一体になっていたりもするでしょう。

ではもう1つの読み方は何でしょうか。それは、字だけを追っている読み方です。活字の羅列に対して目を移動させているだけという感じです。本当になんな読み方をしている子がいるのか、と思われるかもしれませんが、率直に言って、たくさんいます。かなりたくさんいます。実は、筆者も高校時代までそうでした。この読み方をしていく子は100%国語ができませんし、なにより他教科も伸び悩むのです。

「字」理解するの「子」になるのでしょうか。「意味を理解する子」

に転換する方法やスキルはいくつかあるのですが、その中でも家庭で手軽に実践できる方法を1つ書いておきましょう。それを突破口にしてみてください。子どもが中学生の場合、勉強に関して親が介入すると失敗することが多いため、次のようにするといいでしょ。

「勉強以外の話題で、子どもと話をする際、「これって何のためなんだろね?」「なぜそうなんだろね?」「これって○○子とかが知っている知識や経験」と似てない?」と試してみよう。

意味を理解する子は、「疑問を持つ」「自分に置き換える」「目的を考える」「傾向に気づく」。

それをあえて、日常の話題の中で「問い」という形で言葉にしてみるのです。「問われる」と人は、そこに意識がフォーカスします。すると、内容の世界に入っていくため意味を深く考え、理解するようになっていきます。以上引用終了

この記事を読んで改めて今やっていることが将来につながる確信を持つことができました。以前、質問する育ての話をYES通信で書きましたが、質問する中で外部の出来事を自分の事としてとらえることが出来るのです。速聴読でもただ感想を書かせるだけではなく、もっと「作者は何を伝えたかったんだろう」とかその時自分ならどうしてたらえらんだろうと読んでみたことを自分の事としてとらえさせると夫をしていきたいと思えました。

「家庭でも試してみたいか?」

# やる気相談室

## 托鉢

### 托鉢の本当の意味を「存知ですか？」

みなさん托鉢ってご存知でしょうか？托鉢とは辞書で調べると「僧が修行のため、鉢（はち）を持って、家の前に立ち、経文を唱えて米や金銭の施しを受けて回ること。」となっています。

映画やテレビでそのような場面を見かけたことがあるのではないのでしょうか？あの場面を見るとお金を入る人が悪んでいる人で、受け取っている人が施しを受けている貧しい人のように聞こえてしまうのですが、実はそうではないのです。

なぜ修行なのかという点、お坊さんたちはお金のない人のお願ひに行くからなのです。えっと疑問に感じる方も多いと思います。

普通ならお金持ひのところにいったら

がお金は沢山集まるはずなのですが、逆にお金を集めにくい貧しい人のところに行き、施しを受けるのです。だから修行なので。

お金持ちはいつも施しをしているからお金持ちで、貧しい人は施しをしないから貧しいままなのだそう。ですからお坊さんはそんな貧しい人たちに施しのチャンスを与えているのだそうです。

なので、鉢にお金を入れてもお坊さんは「ありがとう」とは一切言いません。それに対して、文句を言っても仕方がないことなのです。逆に施しをさせていただいて私たちが「ありがとうございます」とお礼を言うべきなのです。

お金が少ししかなくて、ちょっとしか施しが出来なくてもいいのです。逆にお金が少ししかないからこそ施しをするべきなのだそう。神様にとっては、お金持ちが1万円施しをするのも、私たちが100円施しをするのも価値は同じなのです。むしろ少ないお金の中から絞り出したわず

かな施しこそ価値があるのだそうです。商売で成功するのは簡単なのだそうです。先に与えれば必ず成功するのだそうです。しかし、私のような凡人にはそれがなかなか出来ないのです。

施しも同じで先に施しをするからまわりまわって自分に返ってくるのです。だからお金のことを通貨というそうです。使うから返ってくるのです。

この話を聞いて本当にびっくりして、それからお賽銭とかも以前に比べると多く出すことが出来るようになってきました。そんなにたくさんは出せませんが・・・ちなみに神社のお賽銭はお賽銭を入れて願いが叶うようお祈りするのではなく、良かったことがあったときにそのお礼としてお賽銭を出すのだそうです。

是非、みなさんもお寺や神社に行かれた際にはこの話を思い出して、いつもより気持ち多めにお布施やお賽銭を出すようにすると皆さんの所にお金が集まってくるかもしれないよ(笑)

二宮敦人 著

最後の医者は桜を見上げて君を想う

書籍紹介



この本は110キロウォークの実行委員を務めておいで平川氏が月一で配信されている手書きの「とつと一通信」で紹介されていた本です。丁度、母が癌で入院したタイミングで平川氏のこの本の解説に興味があったので読んでみました。人間はいつか死にます。私も確実に死にますし、みなさんもいつかは必ず死ぬのです。しかし、私もこの年になって、同期が亡くなったり、子供のころのアイドルが亡くなったりすることで死に対する実感がわいてきているぐらいで、若いころは全く実感がありませんでした。この本は読むと本当に死というもの身近なものだということを感じさせられる本です。結婚して子供が出来た直後に余命半年と宣告される患者とその病院に勤める2人の医者の物語です。この二人の医者は学生時代の親友で熱い思いを学生時代に語り合った中でした。しかし、家業を継いだ一人は患者が必ず助かると信じて延命治療を施す医者になり、もうひとり延命治療で苦しむ患者にいかにか自分らしく最後を生ききるかを伝える医者になります。そんな登場人物の葛藤を描いているのですが、読めば読むほど死というものを考えさせられ、そして泣けてきます。映画化も決まっているそうなのでそれも楽しみな本です。平川さんの「とつと一通信」は188号ということでYES通信は足元にも及びませんが見習ってみたいと思います。